

国語科授業案：  
教科で育みたい人間像「豊かな言語感覚をもつ人」

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部附属静岡中学校 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 由貴 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/0002000474">http://hdl.handle.net/10297/0002000474</a>

# 国語科授業案

## 教科で育みたい人間像 「豊かな言語感覚をもつ人」

授業者 井上由貴

- 1 日時 令和5年11月2日(木) 第1時 10:20~11:10
- 2 学級 3年A組 (3年A組教室)
- 3 題材名 『私』 一読みの視点をもって物語を味わおう

### 4 本題材で願う学び

3人の登場人物の「データ」に関する考え方の違いについて着目し、「私」と「データ」の関係性について級友と語り合うことを通して、物語の主題をとらえ、「私」や「データ」のあり方について自分の考えをもつことができる。

(学習指導要領との関連: [思考力、判断力、表現力等] C (1)エ)

### 5 これまでの子どもの学び

子どもたちとともに学ぶ中で、以下のような学びのあらわれを見とることができた。

一つめは、作品を味わい言葉を吟味することで、読みを深めるための感覚を養うことである。子どもたちは1年生の頃から自分たちで追求テーマをつくりあげて、作品を読む活動を重ねてきており、「ここを読めばおもしろい」という読みの嗅覚を磨いてきている。井上ひさし『握手』(3年時)では、題材を読む中で、子どもたちは以下のような疑問や考えをもった。

- ・題名がルロイ修道士の指文字ではなく、握手になっていることが気になった。
- ・指文字の方が登場回数は多いのに、なぜ題名が「握手」なのだろう。
- ・握手という言葉が本文に何回か出てくるが、何を伝えたいのだろう。
- ・手に関する描写が多く出てくる。手の描写から私の心情や物語の主題につなげていきたい。

(題材の振り返りより)

子どもたちは、物語に登場する握手や指文字に着目し、追求テーマを決めるための語り合いを行った。そして、物語の主題にせまるためには、本文中に3回も登場する「握手」について考えていくことが必要であると見いだした。このような活動を経て「3回の握手で変化しているものは何か」という追求テーマを立てて読みを深めた。

このように、言葉にこだわるからこそ、問いを吟味し、本文のどこに着目すれば読みを深められるのかという視点を子どもたちは身につけつつあり、表現に着目する嗅覚を日々磨いている。

二つめは、他者の読みにふれ、自分自身の読みと比較することを通して、読みを更新していくことである。子どもたちは、語り合いの中で新たな疑問を見いだし

たり、新しい視点で物語をとらえたりする力を身につけつつある。

ハイムポトク『ゼブラ』(3年時)では、子どもたちの疑問や気づきから「ゼブラはどのように変化したのか」を追求テーマとして読みを進めた。主人公であるゼブラの変化を追う中で、子どもたちは本文の「輪郭を見るのではなく、輪郭を包む空間を見ること」という表現に着目し、「空間を見るときはどういうことか」という新たな疑問を見いだして語り合いを行い、次のような思いをもった。

- ・空間を見るというのは、対象を取り巻くすべてのものに意識を向けることだと思った。
- ・空間を見るというのは、物語の中で何度も出てくる「想像力を使う」ということだと思う。想像力を働かせることで、ゼブラは自分の手の見え方が変わったのだと思う。
- ・空間を見る＝想像力と考える。ゼブラは自分の怪我を負った手を「異常がある手」というように輪郭だけで見ていたが、空間を見ることで「自分の手であることに変わりはない」というように見方を変えたと思う。さまざまな視点で物事を見ることが、空間を見ることにつながると思った。

(題材の振り返りより)

このように、「空間を見る」という表現に着目し、他者の意見を取り入れたり、自分の読みと比較したりすることを通して、主人公の変化を漠然ととらえていた子どもが、「ゼブラが自らと向き合い、マイナスにとらえていた事柄についても、プラスに転換して考えることができるようになった」「ゼブラの気持ちだけではなく、考え方や見方も変化している」などと読みを更新し、細部まで本文に着目して読むことができた。

このように、個人で追求した事柄を全体で共有する

際にも、言葉に着目して意見を交わし合うことで、新たな発見や解釈のずれが生じ、より深く本文を読み込み、本文を根拠に考える学びを積み重ねることを大切にしてきた。

これから子どもたちは、抽象度の高い作品に出会うことも増えるだろう。そのときに、自分の視点を大事にして読んでほしい。そのため本題材では、個人や全体で読みを深めるために、重要な役割を果たしてきた追求テーマの設定に力を入れたい。さまざまな題材で子どもたちが自分ごととして読み、学びを深め、豊かな言語感覚をもつ人になることを願っている。

## 6 題材観

### (1) 本題材の価値

本題材は、今までの学びを生かし、言葉に着目することで自ら問いをもち、自身の力で追求していくことができる題材である。

『私』は、現代の日本での生活を切り取ったような、身近な場面で話が展開する。主人公の「私」視点で物語が語られ、2年生で学習した『走れメロス』でも多用されていた心内語が使われているため、話の流れや主人公の心情を表面的に読みとる分には、特に苦勞をすることはない。しかし、一読しただけでは理解しがたい独特の奇妙さをこの物語はもっており、現実と非現実が入り交じったような読後感を抱く。この題材には、純粹に今まで学習してきた読み方を生かして精読を行っても、理解しきれない不可解さがある。読めるのにわからないこの不可解さが、本文をより丁寧に読み込み、言葉に着目するための原動力となるだろう。

文章に書かれたとおりに読むと、対応を「する側」と「される側」の両方の立場を体験した主人公が、「本物」と「コピー」のどちらが削除されても「問題ない」と結論づけるという流れだが、物語全体を読むと、書き手は「問題ない」ととらえていないことが伝わってくる。そして、「私」はどうするべきだったのかは、読者の判断に委ねられている。このように、さまざまなところで違和感を覚える題材であるからこそ、一つ一つの小さな疑問を集約して、関連づけを行いながら追求テーマをつくりあげることで、より深く『私』を読み解くことが可能になるだろう。

以下に『私』の魅力について記述する。

#### ① 個性的な登場人物

物語の中で違和感を生み出しているのが、特徴的な3人の登場人物だ。この3人に着目し、彼らの言動を読み解いていくことが、この物語を理解する鍵となってくる。そして、登場人物と切っても切れない関係にあるのが「本物」と「データ」である。この二つの事

柄についての認識は、3人とも異なる。

市役所を訪れた若い女性は、二重登録されたデータを見分けることができる不思議な力を持っている。たとえば、同じように見えるデータであっても、そこには本物とコピーが存在しており、全くの別物であるという認識だ。また、図書館の女性司書は、二重登録されたデータはどちらも本物であり、二重になっているのは、データではなく人間の方である（ドッペルゲンガーのようなものが存在している）という認識である。そして、主人公の「私」は、物語前半ではどちらが本物でも、どちらが消されても問題ないと認識していた。しかし、後半の図書館の場面では、本物とコピーには明確な違いがあるというように発言している。「本物」と「コピー」に対する3人の認識の比較を行うことで、「二重になる」ということについて着目し、新たな問いをもつことができるだろう。

#### ② 「私」が体験する二つの立場

主人公の「私」は、物語の中で二つの立場を経験している。

一つは、市役所の模範的な職員として、相手の要望に応えるという立場である。市役所を訪れた女性を相手にしたときの「私」は、頭の中のマニュアルに則って完璧な市民対応を遂行していた。しかし、その根本は、親身に寄り添うそぶりを見せつつも、「優秀な職員」として他者から見られたい「私」のひとりよがりな姿であった。

もう一つは、図書館の利用客として対応をされるという立場である。機械的な対応をする司書の女性に「正当な利用者」として見られるよう、貸し出しを強要する「私」。不測の事態に動揺したり、意固地になったりするなど、物語の中でも「私」の人間らしさがあらわれていて、「内面の私」が感じられる場面である。

どちらの立場でも、「私」はあくまで「自分が正しい」と思って行動している。完璧な対応をする職員という自負があり、自分が正当な主張をする利用者だと信じている。しかし、その中身を見ていくと、「完璧」や「正当」という判断の基準は他人にあることが浮き彫りとなり、「私」は外からどう見られるかを基準にして、行動していることがわかる。

だからこそ、それが通用しない状況に陥ると、柔軟な対応ができなくなってしまう。司書とのやりとりは、まさしく外から見られた「私」ではなく、内面の「私」を問われる場面であった。輪郭としての「私」はもっているものの、中身が見えない「私」は、自分の存在を正当に証明することができない。そして、根本的な問題解決にはならないとわかっているはずなのに、本の貸し出しを強要して問題を解決しようとしてしまう。

これらの「私」が置かれた二つの立場を読んでいくことで、完璧なはずの「私」が内包している不安定さや脆さに気づき、外から見た「私」と内から見た「私」のずれに目を向けることができるだろう。

### ③二重になるもの

物語の中で、「二重」という文言が繰り返し登場する。最初はデータの二重登録からスタートしたが、それが段々と人間へと変化していく。図書館の場面での司書の発言をそのままに受け取るのであれば、二重になっているのは情報ではなく「私自身」であるため、二重になっている片方を消すということは、人間である「私」を消すという意味にもとれる。データではなく、人間を削除するとはどういうことだろうか。物理的に消されるというとらえ方もできるが、この場合は、社会的な存在や居場所を奪われるというように読める。前半に、主人公がデータをシュレッターにかけていた場面があるが、後半で見えてくるように、それが人間の存在に関わるものだとするとどうだろう。特に深く考えるわけでもなく、簡単に「個人」を消してしまえるという事実が気がつくとともに、現実の世界でも同じようなことが起こってしまうかもしれないという恐ろしさが浮かび上がってくる。

このように、「二重になるもの」に着目して読んでいくことで、「実際に削除されるものは何か」という疑問が生まれてくるだろう。

### ④物語の主題

この物語の主題は、「データ」に依存している社会や、「本物の私」よりも「データ」が重要視されるといった風潮に対する警鐘である。マニュアル人間である「私」の心情が読みとりにくいところからも、「私」の存在のあいまいさが強調されている。

また、終末部における図書館司書と「私」の会話において、途中から削除される対象が何なのかという主語が省略されている。削除されるのはデータであるのか、人間である「私」なのか。どちらでとらえるかは、明記されていない。そして、削除を行うのは、しかるべき部署の人間という第三者である。おそらく若い女性のように本物とコピーの区別がつく人材ではないだろう。彼らが削除する対象は、データか人間か。そして、本物かコピーか。もしかしたら、「何の問題もない」と考えている「私」自身が消されてしまうのかもしれない。①②③で書いたように、登場人物や二重になることについて考えていけば、物語の主題に子どもたちの力で近づくことができるだろう。本題材を扱うことで、抽象的な文章においても、今までの読みを生かしながら読み解き、子どもたちが自分の意見をもつことができると思う。

### (2) 本題材で願う子どもの姿

本題材で願う子どもの姿は、以下の二つである。

一つめは「子どもたちが、語り合いながら追求テーマをつくりあげる姿」である。子どもたちは、これまでの題材を通して、主人公の心情の変化に着目することや、情景描写に着目することなど、さまざまな読み方を身につけてきている。本題材と出会った際にも、それぞれの読みの視点に則って、追求テーマを吟味するだろう。しかし、『私』は、一人の人物や一つのものにこだわって読み進めても、作品の伝えたいことを読みとることが困難な題材である。追求テーマを話し合う中で、子どもたちの中から、今まで出会った作品のように「主人公にだけ着目しても、物語を理解することにはつながらない」というような視点が出てくるだろう。それと同時に、キーワードとして何度も出てくる「データ」に関してもそれを「単体で見るとはならず、他の要素と関連づけて読む必要がある」と気づくだろう。語り合いの場で子どもたちが疑問を投げかけたり、考えたりする中で読みを更新し、主体的に追求テーマを作っていく姿を期待する。

二つめは、「主題をとらえて「私」や「データ」のあり方について自分の考えをもつ姿」である。子どもたちが個人追求を行う中で、登場人物とデータとを比較してまとめようとする、途中からデータの記述が少なくなり、二重であったのがデータなのか人間なのか、あいまいになっていることに気がつくだろう。子どもたちは、「私」の体験を分析する中で「私」の存在のあいまいさに気づき、「個人情報（データ）」によって形作られた「私」の脆さや、生身の「私」が「私」であることを証明することの難しさに気づくだろう。その上で、物語を単なる虚構としてとらえるのではなく、自身の日常生活と結びつけて考えることで、物語の主題にせまっていってほしい。子どもたちは、ハイムボトク『ゼブラ』で、書かれている事実（輪郭）を読むと同時に、空間（事実が付随すること）を読むことが大切であるということを学んでいる。本題材を『ゼブラ』で学んだ視点をもって読み進めていくと、最後の一文である「何の問題もない」というに表現に着目せざるを得ない。表面上は「問題ない」と主人公は言っている。しかし、物語全体を読めば「主人公は何の問題もないと言っているが、本当にそうだろうか」というように、読者に投げかけられていることが読みとれる。本文の内容を日常生活と結びつけ、他者と交流した上で、ただ正確に作品を読むだけでは、作品を味わうことにはつながらない。この『私』という題材に触れることで、子どもたちが「データ」とは何か、「私」とは何かを問い続け、「私」をどのように認識し、とらえ



ているのか」「大量のデータで形作られた現代社会においてどのようにデータや自分自身と関わっていくのか」

という作品からの問いを受けて、「自分自身はどうありたいのか」という自分の考えをもつ姿を期待している。

## 7 題材構想（全9時間）

- ①『私』を読み、物語の概要をつかもう（1～2時）
- ②感想を交流し、追求テーマを決めよう（3時：本時）
- ③追求テーマ「登場人物とデータの関係性」についてまとめよう（4～6時）
- ④追求したことを全体で共有しよう（7～8時）
- ⑤作品の主題について考えたことをまとめよう（9時）

## 8 題材構想における授業者の考え

### (1) 題材との出会い（1時）

自分自身に目を向けた上で、本題材と出会うことで、「自己を形作るものは何か」という思いをもって、本文を読み進めることができると考える。そのため、作品と出会う前に自分自身について考える時間を設ける。「私は〇〇です」という文を書けるだけ書き、自分がどのような人間なのかを表す中で、表現する難しさを体験する。そうすることで、主人公の「私」により着目し、自分自身と物語上の「私」を比較したり、関連づけたりしながら読んでいくことができるだろう。

### (2) 子どもたちが追求テーマを考える価値（2～3時）

追求テーマを教師ではなく、子どもたちが自ら作っていくことの価値は、以下の2点である。

一つめは、子どもたちが題材に対して思いをもって向き合うことにつながるということだ。追求テーマは、子どもたちの感想や疑問の中から生まれる。だからこそ、子どもたちの「読みたい、解決したい」という意欲を引き出すことができる。意欲をもって題材の本文と向き合うと、細かな表現や描写に着目することとなり、国語科のめざす言葉を吟味する姿につながると考える。

二つめは、子どもたちの読みの更新につながるということだ。本題材の『私』には、違和感を覚える表現（主人公やデータの取り扱われ方など）がふんだんに散りばめられている。どこに着目し読んでいくのかを決めるためには、個人の読みの視点や、言葉にこだわって読む力が必要となってくる。どの表現に着目して読んでいくべきなのかを、子どもたちが吟味し、擦り合わせていく過程が、彼らの言語感覚を磨くことにつながるだろう。物語の大事なところは何かと子どもたちが考え、語り合いながら読みを更新していく過程に価値があると考えられる。

子どもたちに読みを委ねるという姿勢の裏には、教

師の意図が存在する。追求テーマをつくっていく上で、本文の内容からかけ離れてしまったり、何か一つのものに集中して、物語全体をとらえる視点がなくなってしまうたり、もしくは「主題について」というような、大きすぎるテーマに偏ってしまったりすることもあるだろう。授業者も、追求テーマをつくっていく一員として、話し合いの場に参加し、「なぜ〇〇を追求テーマにするか」といいと思ったのかなどと、時には問い直し、発言の意味を子ども自身が言語化することを促し、追求しがたいある価値あるテーマ設定をつくりあげていきたい。

### (3) 主題にせまるための焦点化（4～9時）

子どもたちが主題にせまっていくためには、思考を焦点化していく必要がある。そのためには、個人追求の時間で、「二重になるもの」や「削除されるもの」にふれて追求を行うことが大切になる。なぜなら、読みの視点をもって個人で追求を行わなければ、全体の場で話し合う内容が多岐にわたり、語り合いに発展するのが難しく、それぞれの読みの紹介に留まってしまうからである。読みを更新しなければ読めない本題材に対して、子どもたちが自ら追求テーマを決めて議論をする中で、視点を広げて読みを深めていくことを期待している。

その上で、主題にせまるために本文の「しかるべき部署が、どちらかを「削除」するのだろう。どちらが消えようが、同じ「私」なのだ。何の問題もない。」という表現に着目したい。「何の問題もないとあるが、本当にそうだろうか」と問い直しをすることで、子どもたちがより深く思考することにつながるかと考えている。そして、本文を根拠に作品の伝えたいことを読みとり、自分自身や日常生活、社会に目を向け、それらと関連づけながら、子どもたちが自分の考えをもてるようになることを願っている。

9 予想される子どものあらわれ

時数	活動、問い	子どものあらわれ
1～2	<p><b>『私』との出会い</b>  <b>【自身に目を向けることで、本文への興味・関心を引き出し物語の大筋をつかむ】</b></p> <p>○「私は○○です」の○○に自分を表せると          思う内容を入れることで、自分を形作る要素が何なのかを自覚し、自分を表現することの難しさを実感する。</p> <p>○自身の存在に目を向けた後に、本文に出会う。一読者として物語を味わい、初読の感想を書く。</p> <p>○登場人物や大まかな内容をつかむ。</p> <p>○難しい語句や表現について、全体で確認し、          次回の追求テーマ決めにつなげる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私とは何だろう。</li> <li>・○○に入れるとするなら、できることをいれた方がいいのだろうか。</li> <li>・自分を表現するのは難しい。</li> <li>・話自体は難しくないが、意味がわからない。</li> <li>・人間が二重になるとはどういうことだろう。</li> <li>・話の内容はわかるけれど、何が言いたいのかわからなかった。</li> <li>・「私」「若い女性」「司書」が重要だ。</li> <li>・「データ」がキーワードだと思う。</li> <li>・最後の「何の問題もない」が怖く感じた。</li> </ul>
3	<p><b>追求テーマを決めよう</b>  <b>【子どもたちの感想と疑問を共有し、意欲的に考えたいような追求テーマをつくる】</b></p> <p>○初読の感想を交流し、疑問や自分の読みを交えながら、どんな問いにすれば追求ができそうかを話し合う。</p> <p>○本文の描写に立ち返ることで追求を進められるかを考える。</p> <p>○子どもたちとの話し合いをもとにしながら「作品の主題」を読みとるために、「データ」や「三人の登場人物」に着目しながら、まとめることを確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文に書いていないことをテーマにすると、全体共有の時に話し合いが深まらないから、追求テーマにはふさわしくないだろう。</li> <li>・主題について考えたい。</li> <li>・主題について考えたいけれど、まずは本文を理解することが大事だ。</li> <li>・主人公の「私」について追っていききたい。</li> <li>・題名が「私」である理由はなんだろう。</li> <li>・物語文なら、私の心情を読むのがセオリーだけれど、今回はそれだけでは読めなさそうだ。</li> <li>・「何の問題もない」という終わり方が気になる。わざわざ書くということは、「私」は問題があると感じているのではないか。</li> <li>・3人の登場人物について読んでいききたい。</li> <li>・二重になるとはどういうことだろうか。</li> <li>・個人とデータの結びつきについて考えたい。</li> <li>・登場人物やデータを関連づけて読まなければ、作品の伝えたいことは見えてこないと思う。</li> <li>・「登場人物とデータの関係性」について追求をしていきたい。</li> </ul>
4～6	<p><b>追求テーマ「登場人物とデータの関係性」についてまとめよう</b>  <b>【個人での追求を通して、追求テーマに対しての自分なりの理解と意見をもつ】</b></p>	

	<p>○3人の登場人物や、「データ」について個人でまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若い女性……二重のデータが本物であるかコピーであるかわかる。本物≠コピー（データの話）</li> <li>・司書……二重のデータはどちらも本物で、人間が二重になっている。両方本物（データ&amp;人間）</li> <li>・私……二重のデータが本物であっても、コピーであっても同じであるから問題ない（本物＝コピー）</li> <li>・最初はデータが二重であることを話しているのに、いつの間にか人間が二重になることが当たり前のような感覚で話が進んでいる</li> <li>・「データ」という言葉が途中から使われなくなっていて、まとめるのが難しかった。</li> <li>・「データ」は「私」を形作る要素のはずなのに「私」よりも「データ」の方が重要視されているように読める。</li> <li>・実際の現実世界でも「データ」の方が重要であるというような場面があるかもしれない。</li> </ul>
<p>7～8</p>	<p><b>追求テーマ「登場人物とデータの関係性」でわかったことや疑問点を共有しよう</b>  <b>【語り合うことを通して読みを共有し主題につながる問いを見つける】</b></p> <p>○それぞれのまとめを聞いて自分なりの考えを構築し、全体で語り合う。</p> <p>○最後の場面で主語があいまいになっていることに目を向けることで、本物の私とデータについての考えをより深める。</p> <p>○「何の問題もない」という表現に着目して主題にせまる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前半の若い女性が体験したことを、後半で「私」が体験するという構造になっている。</li> <li>・前半も後半も二重になったデータが消されると読んでいたけれど、最後の場面は主語がはっきりしていない。</li> <li>・最後の場面で「削除」されるのは何だろう。</li> <li>・情報が削除されたら、それと深く関連している個人も消えてしまうから、人間の存在を削除することになるのではないか。</li> <li>・「何の問題もない」とあるが、本当に問題がないのか。問題ないと思っていないからこういう表現になるのではないか。</li> <li>・問題はあると思う。個人と結びつきが強い「データ」を削除したら、「私」が消えてしまうかもしれない。消されたもう一人の私はどうやって自分の存在を証明するのだろう。</li> <li>・現実世界でもデータがないから、本人であったとしても、認められなかったり入れなかったりすることがある。</li> </ul>
<p>9</p>	<p><b>作品の主題を考えよう</b>  <b>【『私』という題名に着目し、物語の主題を考える】</b></p> <p>○題名にも目を向けることで、今までの読みを関連づけながら主題を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・題名に「私」が選ばれているから、「私」に着目すべきだと思う。</li> <li>・「私」とは何かを問うているのだと思う。</li> </ul>

<p>○主題を読みとった上で、「私」や「データ」のあり方について考える。</p> <p>○本文の内容と日常生活を結びつけながら「私」について考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「データ」も大事だけれど、生身の「私」をより大事にしたい。</li> <li>・自分自身で「私」に目を向け「私ってなんだろう」と考え続けることが大事だ。</li> <li>・現実の社会では、実際に人間よりもデータが重要視されて、一人歩きしている部分があると思う。作者はそのことに危機感を抱いていて、「私」について自分自身が考えて、自己の認識を確かなものにするのが大事だと伝えたいのではないだろうか。</li> <li>・この物語は「私」とは何かということについて読者に考えてほしかったのだと思う。主人公の「私」は、外から見られる優秀な私というものを基準として動いている。そこに「私」の意志はなく、外からの評価や見方で簡単に考えを変えてしまう。現実世界でも同じようなことは起こるだろう。現代社会はデータであふれていて、個人を証明するにもデータの情報が必要不可欠である。「私」を形作るデータはたくさんあるが、そのデータが消失してしまったとき、「私」をどのように証明できるのだろうか。「私はこういう人間だ」という自己認識が現代は薄くなりつつあると思う。外側から見た自分だけでなく、内面の自分を見つめないで、データとしての私が消えてしまったとき、「私」の存在があやうくなってしまふ。その視点で物語を見ると、確固たる自分をもっているのは、市役所を訪れた若い女性ということになる。他者からは見分けがつかなくとも、「私がどういう存在であるのか」という自己認識を強く持っており、彼女ならデータが消失したとしても、自己を見失うことはないだろう。主人公は最後の場面で、二重登録された自分の情報を消されても何の問題もないと言っているが、問題はあると思う。「私」は自分と向き合うことを避け、本当の自分というものを見つめようとしていない。消されてしまう「私」が、本当の「私」かもしれないとは考えていない。どちらが消えても問題ないという認識は、どちらも大切にしていなかったり、自身を理解できていなかったりするということだと思う。</li> </ul> <p>現代社会はデータが一人歩きする時代である。本人よりもデータが重要視されがちな世の中であるからこそ、せめて自分くらいは、データの「私」だけでなく「本当の生身の私」を大事にしたいし、他者とかかわるときも「データ」ばかりにとらわれずに、その人自身を見て、かかわっていききたい。</p>
--	--

参考文献：佐野 比呂己（2017）『三崎亜記「私」小考』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室  
 三崎 亜記ほか（2015）『中学国語通信 道標』教育出版株式会社